急性下部消化管出血の内視鏡診療に直結するエビデンスを創出する研究会　研究成果報告

東京医科大学　健診予防医学センター　永田　尚義

【背景と目的】
急性下部消化管出血（ALGIB）は有効な予防薬が存在せず、高齢化の進行に伴い今後さらなる増加と診療の複雑化が予想される。本研究会は、ALGIBにおける内視鏡周術期管理の高品質なエビデンスを創出し、診療標準化に資する基盤を構築することを目的として設立された。

【研究デザイン】
ALGIB患者を対象とした前向き多施設コホート研究を実施し、緊急入院または外来受診時をベースラインとして、周術期管理、内視鏡診断・治療内容、内視鏡後の長期転帰を系統的に追跡した。主要アウトカムは再出血、血栓塞栓症、死亡とし、副次アウトカムとして入院期間、輸血使用、内視鏡治療、IVR、外科治療を評価した。さらに、後ろ向きALGIBコホート研究を併用し、前向き研究結果の妥当性を検証した。

【研究の状況】
2023年1月より全国の医療施設を対象に参加募集を行い、2024年4月に倫理承認を取得後、症例登録を開始した。北海道から沖縄まで42施設が参加し、これまでに前向きコホートとして入院患者1,350例（平均年齢73歳、男性834例）および外来患者87例（平均年齢68歳）が登録され、追跡調査を継続中である。本コホートは、詳細な患者背景、抗血栓薬マネージメント、輸血適応、内視鏡診断･治療内容を包括的に収集している点が国際的にも類を見ない強みである。加えて、後ろ向きコホートとして約7,000例の入院患者データを活用可能である。今後、前向き・後ろ向き両コホートの解析を通じて、患者にとって安全かつ効率性の高いALGIB診療に資する新たなエビデンスを日本から世界へ発信し、ALGIB診療の再構築を目指す。